

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

現代文

自ら問いを立て、考察してきた1年間の
集大成として、「学ぶとは何か」と問いかける
北海道・市立札幌平岸高校 対馬光揮

10:45 生徒のレポートを素材文とした問題を解く



主
深

生徒はまず、対馬先生作成の読解問題に取り組んだ。素材文は生徒が書いた『こころ』に関するレポートで、それを基に対馬先生が2題作問した。解答時間は5分間。答え合わせの後、素材文が生徒のレポートであることを明かし、問いは自身の中から生まれることを実感させた。

本時の概要

【対象・教科・科目】 2年生/国語/現代文B 【分野・単元】 小説/夏目漱石『こころ』
【設定時数】 全15時間のうちの15時間目（P.45に単元の指導計画を掲載）
【育成を目指す資質・能力】 思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性
【学習内容】 『こころ』について生徒が書いたレポートを素材文とした読解問題に取り組ませ、「問い」への意識を持たせてから、現代文の1年間の授業を振り返って、「学びを実感した時」「学ぶとは何か」について個人で考察。その後、4人1組のグループで各自の考えを出し合い、共有した。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

11:14 グループで考えを共有



主
対

4人1組で2つの問いについて考えを述べ合った。「根拠や論理が大切だと思う」「知識が増えるほど、他教科と関連していることに気づく」「社会で目標に向かって進んでいくための準備になる」など、生徒はメンバーの考えを聞きながら、大事だと思う点をワークシートに書き留めた。

つしま・こうき 教職歴5年。同校に赴任して6年目。国語科。「総合的な探究の時間」の統括も担当。従来の授業スタイルに課題意識を持ち、本質的な学びを追究している。

学校概要

◎ 1950年に設置された北海道月寒高校石山分校が前身。教育標語に「For the Best」を掲げる。2005年度、普通科にデザインアートコースを設置。15年度、ユネスコスクールに加盟し、カンボジアスタディツアーや寺子屋プロジェクトなどに取り組む。

◎ 設立 1980（昭和55）年

◎ 形態 全日制/普通科（普通コース・デザインアートコース）/共学

◎ 生徒数 1学年約320人

◎ 2020年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、小樽商科大、北見工業大、北海道教育大、室蘭工業大、弘前大、釧路公立大、公立千歳科学技術大、公立はこだて未来大などに29人が合格。私立大は、札幌学院大、北星学園大、北海学園大、北海道医療大、北海道科学大、女子美術大、多摩美術大、桐朋学園大、東洋大などに延べ300人が合格。

※プロフィールは、2021年3月時点のものです。



11:00 「学ぶとは何か」を考察



主
深

「現代文の授業で学びを実感した時」「学ぶとは何か」という2つの問いについて、個人で考察。「作者の伝えたいことを、以前よりも理解できた時」「知識を使って自分で新しい発想を生み出すこと」など、生徒は自身の考えをそれぞれワークシートに記入した。

10:55 問いを立てる大切さを伝える



深

對馬先生は、本時のメッセージである「問いは、人から与えられるものではなく、自分で生み出すもの」を提示。『山月記』『こころ』、人種差別問題に関する評論の読解などに取り組んだ1年間の授業を振り返り、「授業では問いが与えられるが、社会では自ら問いを立てる力が求められる」と伝えた。

11:30 本時の振り返り



主
深

各自、本時で感じたことをワークシートに記入して提出。生徒は、「自分の考えを他者と共有できるのは幸せなことだと感じた」「複数の意見を知ることは、他者を傷つけない想像力を持つことにもつながると思った」「自分は学んでいるんだという実感を持てた」など、様々な気づきを書いた。

11:23 對馬先生の講評



深

對馬先生は、グループワーク中に机間指導を行った。その中で聞かれた声として、「簡単に納得しない」「疑うことが大事」「視野を広げる」などを紹介した。そして、先生自身が考える9つの学びの要素として、「興味関心・疑問・情報収集・知識・多角的・課題発見・課題解決・表現・愛」を挙げた。

●私が目指す授業
学びの本質を追究しつつ、
自分らしい授業をする

初任時から、資質・能力の育成を目指す授業を心がけてきました。原点は、大学時代の研究活動の中で経験したレポート作成です。そこでは、自分で問いを立て、必要な情報を収集し、根拠に基づいて、人に伝わるように表現します。その過程には、自ら思考するという学びの本質があり、社会で求められる力をつけることにつながったと感じます。そうした資質・能力の育成を目指す授業にすることで、高校での学びを、大学への通過点ではなく、社会への入り口にしたいと考えています。

学習内容が学びの本質から外れないよう、よりどころにしているのが、学習指導要領です。単元の目標は、学習指導要領で使われている表現で設定しています。授業が資質・能力の育成に結びついているか不安な時は、学習指導要領に立ち返ります。学びの本質を見失わないようにしつつ、私が面白いと思うことや、生徒の興味・関心がありそうなことを授業に盛り込むようにしています。

●私の発問・課題設定の観点

生徒が立てた問いを
自分たちで追究する

私の授業は、本時の中心に据えた「問いは自分で生み出すもの」というメッセージを基調としています。普段の授業から、生徒自身が問いを立て、解決する活動を行っています。

本単元では、『こころ』の主人公や登場人物のKに関する疑問点を個人で考えた後、4人1組でテーマを決め、情報収集・整理を行い、読み取った内容をまとめ、発表しました。例えば、Kが自殺した理由が明記されていない点に着目したグループは、「Kはなぜ死んだのか」について追究し、Kが「道」にこだわったことに重きを置き、仏教の八正道の思想を切り口に考察を深めました。

生徒は、そうした問いを最初から立てられるわけではありません。1年次は、私が提示した問いを個人やグループで考え、「GPS-Academic」(*)を利用したワークなどを通じて、視野を広げる練習を積み重ねました(図1)。

思考を深めるために最も重視しているのが、授業の最後に課すレポートです。自分との対話は他者との対

話と同様に大切であり、それが思考や読解の深さにつながると思っています。本単元では、グループワーク後に、個人のレポートを自由なテーマで書かせたところ、「なぜテーマ設定がうまくできないのか」を問いにし、小説の文章構造に原因があると分析したレポートを提出した生徒がいました。

レポート評価は、3段階としています(図2)。問い(テーマ)そのものは、評価対象にしません。あくまで収集した情報や根拠の確かさ、思考の深まりなど、レポートの内容の質を見ます。

定期考査では、教科書の素材文だけでなく、当該作品に関する評論などを素材文として出題し、汎用的な読解力を測ります。

また、教科横断型授業も行っています。特に、表現やアートを通して読解を深めたり、感性を磨いたりすることを重視しています。例えば、美術科と連携し、1年次には『羅生門』の場面を絵で表現する活動を、2年次には『伊勢物語絵巻』を使って場面や心情の読み取りを行いました。本単元では、英語科と連携し、イギリス人翻訳者と日本人翻訳者がそ

図1 思考力の育成

同校では、ベネッセの思考力測定アセスメント「GPS-Academic」を年1回実施している。対馬先生はそれを活用し、現代文で思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)の育成を目的としたグループワークやGPSの事前・事後ワークなどを行っている。

グループワークの例

- ある行動を取る際のメリットとデメリットを比較する。
- 犯罪捜査と情報開示についての素材文を読み、自身の主張を論じる。
- A1に取って代わられる仕事は何かを考える。

図2 レポートの評価方法

レポートは、3段階で評価する。生徒が資質・能力を身につけられなまま学習が終わってしまった場合は、教師が責任を果たしたことになるかと考え、Cだった生徒は個別に指導し、レポートを再提出させて必ずBまで引き上げる。Bだった生徒は、書き直して評価基準に達していればAに引き上げる。一度で基準に達しなくても、努力次第で評価を上げられると思わせることで、学習意欲を高めるのがねらいだ。なお、レポートの評価が評定に占める比率は3割。

評価基準

A	授業の内容や収集した情報を踏まえて、根拠を示しながら自分の意見を記すことができています。
B	授業の内容を踏まえて自分の意見を記すことができています。
C	授業の内容を踏まえて自分の意見を記すことができていない。

※図1・2とも、対馬先生提供資料と取材を基に編集部で作成。

れぞれ英訳した『こころ』を提示し、両者の表現の違いから語句の意味や文脈の重要性を考えさせました。例えば、作品中の「きまりが悪い」という表現を、イギリス人翻訳者は「embarrassed(恥)」と、日本人翻訳者は「shy(内気)」と訳していました。どちらが適切かを問うと、生徒は「前者は道徳的な恥ずかしさ、後者は経験的な恥ずかしさなので、ここでは『shy』が適切ではないか」と、根拠をもって解答しました。

本時では、生徒が立てた問いを起

点に知見を広げ、考察を深めてきた1年間の授業を振り返り、「国語」という具体から「学習」という抽象に転換しました。他教科・科目を含めた今後の学習や日常生活での学びに意識を向けさせるために、「学ぶとは何か」という問いを立てました。

●成果と展望

授業での気づきを
生活や社会で生かしてほしい

『こころ』には、Kの自殺を知った

* ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

主人公が「ふるえだした」場面があります。英語科との教科横断型授業では、「ふるえる」の英訳を『shake』『tremble』『shudder』のいずれを用いるべきか、答えが1つではない「問い」についてグループで議論させました。本時の生徒の振り返りには、「様々な分野の知識を取り入れると、さらに考えが広がり深まると思った」「自分の思いを相手に伝える時、もっと丁寧に言葉を選びたい」と書かれていました。ほかに、Kが語る「道」を、倫理の授業で学んだ道教の「道（タオ）」と結びつけて考えた生徒もいました。授業での学びを普段の生活や社会での活動、他教科・科目の学びに生かすことも意図しているので、そうした生徒の内省を見るとうれしく感じます。

今後の課題は、生徒の主体性を一層引き出すことです。レポートの評価がBの生徒は、書き直して基準に達すればAに引き上げていますが、自らの行動に移す生徒はまだ多くはありません。もっと深く考えたい、上手に自分の考えを表現したいと思、率先してレポートに取り組みむような主体性を引き出す授業を、これから目指していきます。

単元の指導計画

【教科・科目】国語・現代文B 【分野・単元】小説 【テーマ・作品】夏目漱石『ころ』 【設定時数】全15時間の中の15時間目
 【単元目標】目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現する。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1 ~ 3	教科書に掲載されている素材文の前段を読み、登場人物の設定と関係性を読み取る。	文章を読み、構成や展開を的確に捉える。 【知識、技能、判断力、主体性】	①教科書本文の前段から抜粋した文章を読む。 ②「私」「K」「お嬢さん」の人物設定と関係性を把握する。	【主体的な学び】本単元の全体像を説明し、見通しを持たせた上で、各活動の目的と意味を伝える。	ワークシート
4	着目した文や疑問点を整理する。	主体的・批判的に文章を読む。 【技能、思考力、判断力、主体性】	①教科書本文を読む。 ②「私」の発言、または『私』について」「K」の発言、または『K』について」「その他」の3項目について、着目したことや疑問点を整理する。	【対話的な学び】解釈に正解はないことを伝える。	ワークシート
13 ・ 14	教科横断型授業を通じて、語句に着目し、文脈を捉え直した上で効果的に表現する。	語句に着目し、文脈を捉え直した上で効果的に表現する。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①『ころ』のイギリス人翻訳者と日本人翻訳者の英訳の一部を記載したプリントを配布し、日本語と英語の表現を比較する。 ②「きまりが悪い」という表現を、イギリス人翻訳者は「embarrassed (恥)」と、日本人翻訳者は「shy (内気)」と、異なる訳をしているのはなぜか、どちらが適切かを、個人で考えた後、グループで議論する。 ③各グループの代表が発表する。 ④「私はがたがたふるえだした」という表現の英訳として適切な語句は、「shake」「tremble」「shudder」のいずれであるかを、個人で考えた後、グループで議論する。 ⑤各グループの代表が発表する。 ⑥2つの問いについて、自分の考えを再度整理して、ワークシートに書く。	【主体的な学び】今回の学習が本時にとどまらず、今後の学習にも関連することを伝える。 【対話的な学び】個人で思考する時間を十分に確保してから、意見交換を行う。 【深い学び】教師による説明を通じて知識を与え、個人で思考し、他者と意見交換した後に、再度個人で考える活動に戻すことによって、視野の広がりを実感させる。	活動の様子 ワークシート
15	これまでの授業を振り返り、「学ぶとは何か」を考える。	ものの見方、感じ方、考え方を深め、人生を豊かにする態度を育てる。 【思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①素材文は生徒が書いたレポートであることを伏せて、読解問題に取り組みさせる。 ②答え合わせをしてから、素材文の種明かしをし、問いは自分の中にあることを説明する。 ③1年間の授業を通じて学びを実感したタイミングでこれまでの学習を振り返り、「学ぶとは何か」を考える。 ④4人1組となり、各自の「学ぶ」を発表する。 ⑤グループワークで上がった声を紹介するとともに、教師自身の「学ぶ」も伝える。 ⑥本時の振り返りを書く。	【主体的な学び】生徒が書いたレポートを素材文にした読解問題で好奇心を刺激し、学習を自分ごととして捉えられるようにする。 【対話的な学び】同じ体験でも、人によって感じ方が異なることを実感するとともに、「学ぶ」についても多様な捉え方があることに気づく。 【深い学び】自己の振り返りと他者との意見交換によって、これまで感覚的に捉えていた事柄を明確にし、自己の内にあった「学ぶ」を再発見させる。	活動の様子 ワークシート

※対馬先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全15時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp/)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。